中高生とともに差別と闘う

『楽しみと不安のお正月』

吉成タダシ

楽しみと不安のお正月

お正月の頃になると、楽しみと不安が同居するような場面に出くわします。教え子の成人式や同窓会です。お呼ばれするのはありがたく、うれしいのですが、その反面、元気でちゃんとやれてるか、何か苦しいことはなかったか、とついつい思ってしまいます。

年明けすぐ、数年前の教え子タカノリから連絡がありました。

「結婚式をするので出席していただけないでしょうか」

ありがたいお誘いです。スケジュールを確認し、「ぜひとも！」と答えました。

彼は担任していたわけではなく、学年も違い、特に親しい間柄というわけではありませんでした。それでも、弟や従兄弟を担任していたり、親御さんとも親しくさせていただいていたということもあったのでしょう。いつも気軽に声をかけてきてくれる関係でした。

数年前、そのタカノリから突然電話がかかってきました。

「先生、飲みに行きましょう！」

急にどうしたんだろうと思いながら出向いたわけですが、そこで聞かされたのは、自身や従兄弟に降りかかっている、恋愛に関する部落差別でした。とにかく誰かに聞いてほしかったのでしょう。そして、何をどう考えれば良いのか、相談したかったのだと思います。聞きたくない、けど聞いておかなくてはならない、目を背けるわけにはいかない話でした。本当に厳しい現実があります。でも、そのほとんどが表には現れません。だから、「部落差別は無くなった」ような錯覚に陥りがちになるのですが、決してそうではないということです。差別意識は地中深くに染み込み、いざとなれば浮かびあがり顔をのぞかせるのです。

リアルな現実

実はこういった話は、残念ながらたびたび聞かれます。ただ、みんな誰にでも話したり相談するかというと、そうでもなさそうです。話が通じる人、共感的に聞いてくれる人、的確なアドバイスがもらえそうな人、そんな人を意識的にか無意識にか、選んで相談しているように思います。

H高校に入学したシホ。友達がほとんどいない中で、新たな友達をつくろうと、積極的に周りの友達にかかわっていったシホ。ある日、新しくできた友達と彼氏の話になった時、こう告げられたと言いました。

「彼氏はほしいけど、SとDの子はやめとく」（SもDも被差別部落の地域名）

学習を積み重ねていたシホは、瞬間的に、それが部落差別であることを感じ取りました。

「なんで？」

「だって、母さんがそう言うんだもん」

「じゃあJはどうなの？」（Jはシホが暮らしている被差別部落の地域名）

「Jはいいよ」

「なんで？」

「だって、母さんに言われてないもん」

シホがこのとき頑張れたのは、ここまでででした。新しくできかけた友達を、手放したくなかったからです。

しかし、悩んだ挙げ句、数日後、シホは思い切ってその友達に語りかけました。

「あの時話してくれたことって、部落差別だと思う…」

中学時代にしてきた学習について話すシホに、友達はしっかりと耳を傾け、その後も友達であり続けたそうです。そんなシホの苦悩を、正月明けに聞いたこともありました。

またあるとき、同窓会の三次会で、「今日は先生に話があって来た」と、ヨシが切り出しました。何ごとかというと、大学時代に受けた部落差別についてでした。

ある夜、下宿にやってきた友人が、部落差別の話をし始めたといいます。散々言う悪口をこらえにこらえて聞いていたものの、「部落の人間の血は緑」という一言に、さすがにこらえきれず、台所に行き、包丁を取り出し、「オレがお前の言う部落だ。本当に緑かどうか、見せてやろうか」と、怒りと悔しさをこらえながら訴え、迫ったそうです。

みんな、本や資料の中だけのことと思い、当事者といえどもなかなか自分ごとにはなっていきません。自分の身に迫って初めて、事の重大さに気づきます。夢物語の中のお話ではなく、リアルな現実なのだということにハッと息をのむのです。そしてその思いは、今も、親となり、我が子を見る眼として生々しく息づいています。つまり、あのころ中高生だった若者は、今も形を変えて、悩み続けているのです。乗り越えられぬ壁を密やかに胸に抱えたまま。

自分に試されていること

話を戻し、タカノリの結婚について。結婚に至るまでの障害について突っ込んで訊くと、「同じ地域なので問題はありませんでした」とのこと。そして、こう付け加えました。

「それでもやっぱり知識に敵うものはないと感じました！　正直、中学校で教えていただいたことなど、僕ら世代には関係ないことと思っていたのは確かです。今になっても続くなんて思ってもいませんでした。まだ周りの友達、弟の友達も訳のわからないしがらみに振り回されているのは事実です。でも、それに唯一勝てるのは教育だけだと改めて思っています。先生、まだまだ頑張ってくださいね！」

託されたこのバトン。どう受け継いでいくか。乗った以上、途中下車するつもりはありませんが、どうやってケリをつけていくか。独りではどうしようもありません。仲間を作り続ける力、ぶれない力、それが自分に試されているのだと思います。

イラスト　中島　亜唯